慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『痩我慢の説』と『氷川清話』：勝海舟と福澤諭吉の間 : (その一)
Sub Title	Yasegaman no setsu' and 'Hikawa seiwa' : the relationship between Katsu Kaishu and Fukuzawa Yukichi : (1)
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1997
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.90, No.1 (1997. 4) ,p.1- 17
JaLC DOI	10.14991/001.19970401-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19970401-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」90巻1号（1997年4月）

『痩我慢の説』と『氷川清話』

――勝海舟と福澤諭吉の間――（その一）

飯　田　　鼎

（一）　幕末に対照的な二人の巨人，勝海舟と福澤諭吉

幕末とは，一般に嘉永六（1853）年，アメリカ合衆国海軍提督ペリーが，軍艦四隻を率いて浦賀に来航，武力を背景に幕府にたいし開国を迫った時に始まるといわれている。この事件は，幕府の伝統的な鎖国政策に根本的な変化を強いる結果となったが，より具体的には，まず何よりも，「攘夷か開国か」という外交上の一大難問とともに，外国諸国の政治的，経済的および軍事的な力を評価した上で，いわゆる海防の充実，すなわち西欧列強に匹敵しうる海軍の建設が，緊急のさし迫った課題として提起されたことは当然であった。

開国派と攘夷派あるいは条件つきの開国派，立場はさまざまであったが，いずれにしても，ヨーロッパ諸国の強大な勢力に対抗するために，西欧の制度および文物を導入することは不可欠であったし，そのためには，ヨーロッパ文明の根底を形づくる学問，自然科学および社会科学の研究が求められたことは云うまでもない。語学の習得を手段として西欧文明そのものの理解を象徴する蘭学，そして後には英学，総じて洋学と称せられたものは，当時の尖端的な知識人が，これによって，西欧近代はどのような国家と社会を形成しているのか，その端緒をひき出す武器であったのである。

幕府の瓦壊は，洋学を志す者にとっては，必ずしも驚天動地の現象ではなく，将来，必然的に起るべくしておこる事件として予想しえた事柄であった。だが問題は，崩壊が避けられないかとも思われる徳川政権の後に，どのような政府が現われるか，いやむしろどのような政権を打ち樹てるべきか，この民族の興亡にかかわる問題にたいして試行錯誤しつつも，国民にたいして，その赴くべき前途を指し示した人物のなかで，福澤諭吉と勝海舟は，もっとも傑出し，しかも注目すべきことに，その世界観や人生観および政治にたいする姿勢において，きわめて対照的な存在であったことであろう。勝と福澤を，幕末動乱のこの時点において正しく評価することは，恰も，世紀末を迎えて，その様相において幕末に酷似しているかにみえる現代の知識人にとって，無益ではないであろう。

そこで，この二人の人生観を象徴的に示す福澤の『瘦我慢の説』と勝の『氷川清話』を比較対照しつつ，幕末明治に生きた巨人の実像に迫ることにしよう。

（二）『瘦我慢の説』における武士道

福澤諭吉は，明治二四年十一月二七日に脱稿して数本の写本をつくり，勝海舟，榎本武揚，木村芥舟，栗本鋤雲および徳川頼倫等，数名の者に示した後，筐底に深く蔵して余人に秘してきた『瘦我慢の説』の冒頭でつぎのようにのべている。

> 「立国は私なり，公に非ざるなり。地球面の人類その数億のみならず，山海天然の境界に隔てられて，各處に群を成し各處に相分るゝは止むを得ずと雖も，各處におのおの衣食の富源あれば，之に依て生活を遂ぐべし。又或は各地の固有に有餘不足あらんには互に之を交易するも可なり。即ち天与の恩惠にして，耕して食ひ，製造して用ひ，交易して便利を達す。人生の所望この外にある可らず。何ぞ必ずしも区々たる人爲の国を分て人爲の境界を定むるを須(もち)ひんや」(1)

読者はまず，「立国は私なり，公に非ざるなり」という文言に驚かされるであろう。交通機関の極度の発達によって，「国境のない時代」の到来が予想されるとはいえ，民族間の争闘はやむことなく，その民族を基盤とした国民国家が厳として存在し，他国籍者を自国民から峻別する現代，「立国は公なり」と思うのが普通であろう。しかし福澤の主張をよく読んでみると，国家なるものは，そもそも人間の本来的な私的感情の賜物であるということを意味していることがわかる。すなわち

> 「況んや其国を分て隣国と境界を争ふに於てをや。況んや隣の不幸を顧みずして自から利せんとする於てをや。況んや其国に一国の首領を立て，之を君として仰ぎ之を主として事へ，其君主の爲めに衆人の生命財産を空うするが如きに於てをや……」(2)。

本来，国などというものは，人間の私的感情から発するものであるが，しかしひとたび，国家が成立してしまえば，人民はますますこれに拘泥し固着し，いわゆる忠君愛国の情なるものが発生し，国民最高の美徳として称揚されると福澤は説いている。

> 「都(すべ)て是れ人間の私情に生じたることにして，天然の公道に非ずと雖も，開闢以来今日に至るまで世界中の事想を観るに，各種の人民相分れて一群を成し，其一群中に言語文字を共にし，歴史に碑を共にし，婚姻相通じ，交際相親しみ，飲食衣服の物，都て其趣を同うして，自から苦楽を共にすると

（1） 慶應義塾編『福澤諭吉全集』第六巻，『瘠我慢の説』。559頁。
（2） 前掲，559頁。

きは，復た離散すること能はず。即ち国を立て又政府を設る所以にして，既に一国の名を成すときには，人民はますます之に固着して自他の分を明にし，他国他政府に対しては恰も痛痒相感ぜざる如くなるのみならず，陰陽表裏共に自家の利益榮誉を主張して殆んど至るざる所なく，其これを主張することいよいよ盛なる者に附するに，忠君愛国等の名を以てして，国民最上の美徳と称するこそ不思議なれ。故に忠君愛国の文字は，哲学流に解すれば純乎たる人類の私情なれども，今日までの世界の事情に於ては，之を称じて，美徳と云はざるを得ず。」(3)

「立国が私である」以上，自分の生国を祖国と呼び，一度，国難に遭遇すれば，そのために生命財産をも犠牲にすることも敢えてするいわゆる忠君愛国の精神は，純然たる人類の私情ではあるけれども，しかしそれは，たんなる私情ではなくして，「哲学の私情」であり，「哲学の私情」は，「立国の公道」であると，福澤はいう。そしてこの公道が，公徳として承認されるのは，ただ一国においてだけでなく，それぞれの国家的な対立，たとえば，西欧諸国と日本，日本と中国あるいは朝鮮はもとより，かの幕藩体制における各藩の利害対立にみられるように，最後まで自己を主張してやまないのは，人類の私情ではあるが，公道と認めざるをえない，と云うのである。

福澤は，このような論理を，つぎのような具体的な例に徴して説明している。

「其趣を喩へて云へば，父母の大病に回復の望なしとは知りながらも，実際の臨終に至るまで醫藥の手当を怠らざるが如し。是れも哲学流に云へば，等しく死する病人なれば，望なき回復を謀るが爲め，徒に病苦を長くするよりも，モルヒネなど與へて臨終を安楽にすることこそ智なるが如くなれども，子と爲りて考ふれば，億萬中の一を僥倖しても，故(ことさ)らに父母の死を促すが如きは，情に於て忍びざる所なり。左れば自国の衰頽に際し，敵に対して固より勝算なき場合にても，千辛萬苦，力のあらん限りを盡し，いよいよ勝敗の極に至りて始めて和を講ずるか，若しくは死を決するは立国の公道にして，国民が国に報ずるの義務と称すべきものなり。即ち俗に云ふ瘦我慢なれども，強弱相対して苟も弱者の地位を保つものは，単に此瘦我慢に依らざるはなし。啻(ただ)に戦争の勝敗のみに限らず，平生の国交際に於ても瘦我慢の一義は決して之を忘る可らず」。

福澤のこの瘦我慢の思想にたいする思い入れは，彼の武士道にたいする洞察をその背後に秘めていることであり，この武士道をもって勝海舟と榎本武揚に迫っていることが特徴的で興味深い所である。さらに，つぎのように云う。

「又，古来士風の美を云へば，三河武士の右に出る者はある可らず。其人々に就て品評すれば，文に武に智に勇に，おのおの長ずる所を殊にすれども，戦国割據の時に當りて徳川の旗下に属し，能く自他の分を明にして二念あることなく，理にも非にも唯徳川家の主公あるを知て他を見ず，如何なる非運に際して辛苦を嘗(なめ)るも曽て落胆することなく，家の爲め主公の爲めとあれば，必敗必死を眼前に

(3) 前掲，560頁。
(4) 前掲，560～561頁。

見て尚ほ勇進するの一事は，三河武士全体の特色，徳川家の家風なるが如し。……。

左れば痩我慢の一主義は固より人の私情に出ることにして冷淡なる数理より論ずるときは殆んど兒戯に等しと云はるゝも辯解に辞なきが如くなれども，世界古今の実際に於て，所謂国家なるものを目的に定めて之を維持保存せんとする者は，此主義に由らざるはなし。我封建の時代に諸藩の相互に競争して士気を養ふ(ママ)たるも此主義に由り，封建既に廃して一統の大日本帝国と爲り，更に眼界を廣くして文明世界に独立の體面を張らんとするも，此主義に由らざる可らず。(4)」

中津奥平藩の下級武士の子として生まれた福澤諭吉が，「門閥制度は親の讐でござる」と喝破したことは，よく知られている。この場合，門閥制度とは，封建制度と同義語として理解されるが，福澤は，身分制度の厳重な封建体制の社会的規範を敵視し抵抗しつつも，封建制度が数百年に亙って持続するなかで培われた武士道の精神こそは，時代を超越して固守すべき徳目であり，まさにその核心をなすものこそ痩我慢の説であると云う。

「故に人間社会の事物，今日の風にてあらん限りは，外面の體裁に文野の変遷こそある可けれ，百千年の後に至るまでも，一片の痩我慢は立国(5)の大本として之を重んじ，いよいよますます之を培養して其原素の発達を助くること緊要なるべし」。

わが国において，封建制度自体は亡ぶべくして亡びたけれども，その旧社会の支配階級ともいうべき武士階級の道徳，すなわち武士道こそ，痩我慢として，国を治める者が，経綸を重んじ士気を養うために尊重しなければならぬ徳目であるというのが，福澤の武士道観であり，勝海舟と鋭く対立する側面であった。

「然るに爰(ここ)に遺憾なるは，我日本国に於て今を去ること二十餘年，王政維新の事起りて，其際不幸にも此大切なる痩我慢の一大主義を害したることあり。即ち徳川家の末路に，家臣の一部分が早く大事の去るを悟り，敵に向て曽て抵抗を試みず，只管(ひたすら)和を講じて自から家を解きたるは，日本の経済に於て一時の利益を成したりと雖も，数百年養ひ得たる我日本武士の気風を傷ふたるの不利は決して少々ならず。得を以て償ふに足らざるものと云ふ可し(6)」。

福澤の武士道の論理からすれば，「此時に当りて徳川家の一類に三河武士の舊風あらんには，伏見の敗餘，江戸に帰るも更に佐幕の諸藩に令して再挙を謀り，再挙三挙遂に成らざれば退て江戸城を守り，假令(たと)ひ一日にても家の運命を長くして尚ほ万一を僥倖し，いよいよ策竭るに至りて城を枕に討死するのみ(7)」という道徳感こそ，武士の亀鑑ともいうべきものであったろう。

（4） 前掲，560～561頁。
（5） 前掲，562頁。
（6） 前掲，562頁。
（7） 前掲，562頁。

注意すべきことは，福澤がここで展開しつつある武士道は，「瘦我慢」と云い換えられているにせよ，いわば定式化された日本古来の武士の挙措および振舞，「花は桜木，人は武士」と謳われた，いわば古典的な武士道であり，こうした観点からするとき，勝海舟の江戸城開城にあたってとった行動は，三河以来の古典的武士道を裏切るものと観念されたことも理解できよう。それでは，具体的に，勝のどのような行動が，三河以来の士風を裏切るものであると云うのであろうか。福澤はつづけて云う。

「然るに彼の講話論者たる勝安房の輩は，幕府の武士用ふ可らずと云ひ，薩長兵の鋒敵す可らずと云ひ，社会の安寧害す可らずと云ひ，主公の身の上危しと云ひ，或は言を大にして墻(かき)に鬩(せめ)ぐの禍は外交の策にあらずなど，百方周旋するのみらず，時としては身を危うすることあるも之を憚らずして和議を説き，遂に江戸解城と爲り，徳川七十万石の新封と爲りて無事に局を結びたり」。

「彼の講和論者たる勝安房の輩」という表現は穏かではない。恰も裏切者にたいする断罪のような響きが濃厚である。しかしこの激越な言葉につづく文言，すなわち，「幕府の武士用ふ可らず」から始まり，「薩長兵の鋒敵す可らず」，「社会の安寧害す可らず」，「主公の身の上危し」そしてさらに，「墻(かき)に鬩(せめ)ぐの禍は外交の策にあらず」に至る勝海舟の言動の描写は，それぞれ，旗本および佐幕藩を中核とする幕府軍の戦意の喪失，新鋭のゲベール銃によって武装された歩兵部隊にたいする旧式な幕府軍隊の劣勢，内乱の深刻化に伴う社会不安，徳川慶喜の恭順の宣言および内戦によって外国勢力の干渉をうける危険などを示唆しているが，福澤は，それにもかかわらず，日本古来の武士道の維持のため，瘦我慢に耐えて闘え，と云うのである。

「蓋し勝氏輩の所見は内乱の戦争を以て無上の災害無益の勞費と認め，味方に勝算なき限りは，速に和して速に事を収るに若かずとの数理を信じたるものより外ならず。其口に説く所を聞けば，主公の安危又は外交の利害などと云ふと雖も，其心術の底を叩て之を極むるときは，彼の哲学流の一種にして，人事国事に瘦我慢は無益なりとて，古来日本国の上流社会に最も重んずる所の一大主義を曖昧糢糊の間に瞞着したる者なりと評して，之に答ふる辞はなかる可し」[8]。

要するに，福澤の勝への批判は，勝の行動自体，まさに敗北主義そのものである，というにほかならない。士風維持の視点からすると，国家存亡の危急にあっては，勝敗は問題ではなく，たしかに徹底抗戦は，「兵乱の爲めに人を殺し財を散ずる」惨事をひきおこすことからすれば，勝の処置がその禍を軽くしたという点では評価できるけれども，「立国の要素たる瘦我慢の士風を傷ふたるの責は免かる可らず。士風の維持は萬世の要なり」と云う。

ここで興味深いことは，勝の「瘦我慢」の哲学を無視するその独自の哲学のことである。「其心

（8） 前掲，563頁。

術の底を叩て之を極むるときは，彼の哲学流の一種にして」という表現である。勝が，たんなる卑怯未練の裏切者ではなく，一種の哲学を堅持し，これに従って行動していることを認めている点である。福澤にとって，武士道とは，痩我慢にほかならなかったが，この観点からすれば，勝の行動は武士道からいちじるしく逸脱し，誤っているということになる。勝の幕末における終戦処理は，福澤によれば彼の哲学から発するものであるけれども，武士道の精神とは云い難く，到底容認することはできないとしながらも，しかもなお福澤も，勝の心底に横たわる勝一流の哲学の独自性は，これを認めざるをえなかったのではなかろうか。その意味で，つぎの一節は重要な論点を秘めていると云えよう。

「然りと雖も勝氏も亦人傑なり，当時幕府内部の物論を排して旗下の士の激昂を鎮め，一身を犠牲にして政府を解き，以て王政維新の成功を易くして，之が為めに人の生命を救ひ，財産を安全ならしめたる其功徳は少なからずと云ふ可し」[9]。

「一身を犠牲にして政府を解き，以て王政維新の成功を易くする」ことが，武士道の発露でなくて何であろうか。福澤と勝は，武士道の理念あるいは型式においては同じでありながら，その行動様式においては，いちじるしくその態様を異にしていたと云うべきではなかろうか。その証據としてつぎの一節は象徴的である。

「此點に就ては，我輩も氏の事業を軽々看過するものにあらざれども，独り怪しむ可きは，氏が維新の朝に曩(さ)きの敵国の士人と竝立(ならびたつ)て得々名利の地位に居るの一事なり」。

福澤は，これらの文章の中で，勝海舟の出処進退が，武士道の精神に違背しているのは，「忠臣は二君に見(まみ)えず」という遺風に背くからだというのであって，ここではじめて，勝と福澤の人生観，世界観の問題について論ずる段階に到達した。

すなわち，この『痩我慢の説』は，大別して前段と後段の二部に分かれ，前段は，福澤からすれば，「敗北主義」ともいうべき平和的な手段による徳川政権の終焉，江戸城開城の処置が，痩我慢の精神，すなわち武士道に悖るものであると云うのにたいし，後段は，勝の仕える徳川家にとっては敵対者である明治政府，とりもなおさず薩摩および長州中心の藩閥政権のなかに，かっての仇敵として争った人々に伍して枢要な地位をしめ，顕官として位し，少しも恥ずるところのないのは，何よりも痩我慢の精神を忘却し，武士道を裏切るものとして許せないと，福澤は主張する。

「幸にして明治政府には専制の君主なく，政権は維新功臣の手に在りて，其主義とする所，都(すべ)て文明国の顰に倣ひ，一切萬事寛大を主として，此敵方の人物を擯斥せざるのみか，一時の奇貨も今日の

（9） 前掲，564頁。

永日の正貨に変化し，旧幕府の旧風を脱して新政府の新貴顕と爲り，愉快に世を渡りて曾て怪しむ者なきこそ古来未曾有の奇相なれ。我輩は此一段に至りて，勝氏の私の爲めには甚だ気の毒なる次第なれども，聊(いささ)か所望の筋なきを得ず[10]」。

福澤は，勝が，江戸城の平和的開城により，事を処理したのは，表面上は官軍との約條などの理由はあろうけれども，「其内実は徳川幕府が其幕下たる二，三の強藩に敵するの勇気なく，勝敗をも試みずして降参したるものなれば，三河武士の精神に背くのみならず，我日本国民に固有する瘦我慢の大主義を破り，以て立国の根本たる士気を弛めたるの罪は遁る可らず[11]」と断言する。すなわち後段においても，勝が，たとえ一時的に江戸市民を戦禍から免がれしめ，生命財産を救ったにせよ，強敵に当る勇気をもたず，士風を頽廃させた責任は逃れられないと，福澤は強調するが，では福澤は，具体的に勝が，どのような形で責任をとるべきだと云うのであろうか。

「断然政府の寵遇を辞し，官爵を棄て利禄を抛ち，単身去其跡を隠すこともあらんには，世間の人も始めて其誠の在る所を知りて其の清操に服し，舊政府放解の始末も眞に氏の功名に帰すると同時に，一方には世教萬分の一を維持するに足る可し。即ち我輩の所望なれども，今その然らずして恰も国家の功臣を以て傲然自から居るが如き，必ずしも窮窟なる三河武士の筆法を以て弾劾するを須たず，世界立国の常情に訴へて愧るなきを得ず，啻に氏の私の爲めに惜しむのみならず，士人社会風教の爲めに深く悲しむ可き所のものなり[12]」。

これはきわめて厳しく勝海舟を弾劾した文章と云うべきであろう。しかし福澤は，勝と同時に同じく幕臣として，徳川政権の末期に幕府海軍において重きを成した榎本武揚にたいして，やはり瘦我慢の説の立場からきびしい批判と責任追求を展開する。

周知のように榎本は，勝とともに幕府海軍の双璧であったが，勝の説得を聴き入れず，幕府の精鋭艦隊を率いて江戸湾を脱出，箱館において，要塞五稜廓に拠って官軍に抵抗，戦いに敗れて降伏し，後に維新政府に仕えて爵位を授けられ，栄職に就いた。明治政府との関係では，勝海舟と同様のようであるが，福澤は，榎本をつぎのように勝と区別する。

「此時に当り徳川政府は伏見の一敗復た戦ふの意なく，只管(ひたすら)哀を乞ふのみにして人心既に瓦解し，其勝算なきは固より明白なる所なれども，榎本の挙は，所謂(いわゆる)武士の意気地即ち瘦我慢にして，其方寸の中には竊(ひそか)に必敗を期しながらも，武士道の爲めに敢て一戦を試みたることなれば，幕臣又諸藩士中の佐幕党は氏を総督として之に隨従し，都て其命令に従て進退を共にし，北海の水戦，箱館の籠城，その決死苦戦の忠勇は天晴の振舞にして，日本魂の風教上より論じて，之を勝氏の始末に比すれば年を同うして語る可らず[13]」。

---

(10) 前掲，565頁。
(11) 前掲，566頁。
(12) 前掲，566頁。
(13) 前掲，567頁。

榎本武揚の行動は，武士道の根幹ともいうべき痩我慢の説に忠実に，まさに武士道の精華を発揮したもので，勝のそれとは同日に論ずることはできない，と福澤は称揚するが，それにもかかわらずその榎本にたいしても，勝に対して放ったと同じ非難の矢を向ける。

「氏の挙動も政府の処分も共に天下の一美談にして間然す可らずと雖も，氏が放免の後に更に青雲の志を起し，新政府の朝に立つの一段に至りては，我輩の感服すること能はざる所のものなり」[14]。

ここでもまた，「忠臣は二君に見(まみ)えず」という武士階級のモラールが強調されている如くであるが，榎本にたいする批判の要諦は，武士道の本流，すなわち力戦奮闘して，もって主家の再興のために死力を盡したが及ばず，ついに降伏という点では，武士の意気地を示したものとして，福澤は評価する。しかし，日本武士の人情に照らしてみると，「新政府に出身して啻に口を糊するのみならず，累遷立身して特派公使に任ぜられ，又遂に大臣にまで昇進し，青雲の志達し得て目出度しと雖も，顧みて往事を回想するときは情に堪えざるものなきを得ず」[15]。では，福澤の云うところの日本武士の人情」とは一体どのようなもので，榎本の行動が，いかなる点で，この「日本武士の人情」に違背すると云うのであろうか。

「当時，決死の士を糾合して北海の一隅に苦戦を戦ひ，北風競はずして遂に降参したるは是非なき次第なれども，脱走の諸士は最初より氏を首領として之を恃み，氏の為めに苦戦し氏の為めに戦死したるに，首領にして降参とあれば，假令同意の者あるも，不同意の者は恰も見捨てられたる姿にして，其落膽失望は云ふまでもなく，況して既に戦死したる者に於てをや。死者若し霊あらば，必ず地下に大不平を鳴らすことならん[16]。

福澤は以上のようにのべて，箱館五稜郭開城についての伝えられている経緯についてふれる。すなわち，総督榎本武揚が，戦況が絶望的であることを悟り，部下に降伏の内意を伝えて，ともに政府軍の軍門に降ることを勧告したのは，明治二年五月十六日（西暦一八六九年六月二五日）のことであった。いうまでもなく，これに同意する者も少なくなかったと思われるが，「一部分の人は之を聞て大に怒り，元来今回の挙は戦勝を期したるに非ず，唯武門の習として一死以て二百五十年の恩に報るのみ，総督若し生を欲せば出でて降参せよ，我等は我等の武士道に斃れんのみとて憤戦止まらず，其中には父子諸共に切死(きりじに)したる人もありしと云ふ」[17]。土方歳三等の新撰組の武士たちを指しているのであろうか。福澤は，三千年の昔（福澤の説……筆者，後段参照）中国に伝わる項羽の奮戦を例にひき，「初め江東の子弟八千を率いて西方に転戦，但し楚軍は振わず，幾回かの戦闘に戦没

(14) 前掲，567頁。
(15) 前掲，567頁。
(16) 前掲，567～568頁。
(17) 前掲，568頁。

して，いまや江東の子弟は，ひとりも居ないという状況に立ち至った。敗走して烏江の畔(ほとり)に辿りついた時，「或人は尚ほ江を渡りて再挙の望なきにあらずとて其死を留めたりしかども，羽は之を聴かず，……斯る失敗の後に至り，何の面目か復た江東に還りて死者の父兄を見んとて，自盡したる其時の心情を詩句に写したものなり」として，

烏江水浅騅能逝　　一片義心不可東

（烏江水浅く，騅能逝くも，一片の義心，東すべからず）

を引用し，「漢楚軍談のむかしと明治の今日とは世態固より同じからず，三千(ママ)年前の項羽を以て今日の榎本氏を責むるは，殆んど無稽なるに似たれども萬古不変は人生の心情」であるとして，榎本の責任を追求する。福澤は，この『痩我慢の説』の末尾に，「以上の立言は，我輩が勝榎本の二氏に向て攻撃を試みたるに非ず。謹んで筆鋒を寛にして苛酷の文字を用ひず……」とのべられているが，以下の榎本批判の文章は，痛烈な断罪にも近い表現と云うべきであろう。

「氏が維新の朝に青雲の志を遂げて富貴得々たりと雖も，時に顧みて箱館の舊を思ひ，当時隨行部下の諸士が戦没し負傷したる惨状より，爾来家に残りし父母兄弟が，死者の死を悲しむと共に，自身の方向に迷うて路傍に彷徨するの事実を想像し聞見するときは，男子の鉄腸も之が爲めに寸断せざるを得ず。夜雨秋寒うして眠らず，残燈明滅独り思ふの時には，或は死靈生靈無数の暗鬼を出現して眼中に分明なることもある可し」[18]。

福澤は，一体，榎本にたいしてどのような身の処し方を求めるのであろうか。

「左れば我輩を以て氏の爲に謀るに，人の食を食むの故を以て必ずしも其人の事に死す可しと勧告するにはあらざれども，人情の一點より他に対して常に遠慮するところなきを得ず。古来の習慣に従へば，凡此種の人は遁世出家して死者の菩提を弔ふの例もあれども，今の世間の風潮にて出家落飾も不似合とならば，唯その身を社会の暗處に隠して其生活を質素にし，一切萬事控目にして世間の耳目に觸れざるの覚悟こそ本意なれ」[19]。

勝とは異なり，批判の筆鋒は榎本の場合にはやや抑制されているように思われるけれども，彼が多くの部下を戦場において喪い，これらの人々の霊を慰める行為をなさず，顕官の地位に留まることへの非難は，つぎの激烈な一節となって現われ，勝にたいする非難よりも激しいものが感じられよう。

「之を要するに維新の際，脱走の一挙に失敗したるは，氏が政治上の死にして，假令ひ其関係の身は死せざるも最早政治上に再生す可らざるものと観念して唯一身を慎み，一は以て同行戦死者の霊を

(18)　前掲，568頁。
(19)　前掲，569頁。

弔して又其遺族の人々の不幸不平を慰め，又一には凡そ何事に限らず大挙して其首領の地位に在る者は，成敗共に責に任じて決して之を遁る可らず，成れば其栄誉を専らにし敗すれば其苦難に当るとの主義を明にするは，上流社会の風教上に大切なることなる可し。即ち是れ我輩が榎本氏の出處に就き所望の一點にして，獨り氏の一身の爲めのみにあらず，国家百年の謀に於て士風消長の爲めに軽々看過す可らざる所のものなり」[20]。

福澤は，すでにのべたように，明治二十四年十一月二十七日に脱稿，数本の写本をつくり，勝海舟をはじめ，榎本武揚，木村芥舟（幕府時代，攝津守），栗本鋤雲および徳川頼倫に示し，筐底に蔵して余人に示さなかったのであるが，栗本等の手から本書の収容が洩れ，明治二十七年頃と思われるが，『奥羽日日新聞』に掲載された。同紙の社長，友部伸吉が上京の折りに，昵懇の間柄であった栗本鋤雲を訪問した際，その写本を示され，極秘のうちに全文を写しとり，これを持ち帰った。

彼は内容からみて大きな社会問題に発展する可能性があるとみて，古本屋の店頭で発見したという前提の下に，著者の名も勝および榎本の名も欠字として明らかにせず，誠に珍らしい大文章で，文天祥の「正気歌」や諸葛孔明の「出師（すいし）の表」にも比すべき内容であるので，世道人心のためこれを公けにするという意味の前書きを付して発表した。（慶應義塾編『福澤諭吉全集』第六巻，所収，富田正文『瘦我慢の説』604頁～606頁参照）

やがて奥羽方面で非常な評判となり，二，三の新聞でこれを転載するものもあったので，自然に福澤の耳にも入り，福澤も，秘密にしていたものが洩れた以上，公けにしてもよかろうと判断し，側近の人々とはかって，これを『時事新報』の明治三十四年一月一日と三日，二回に亘って掲載した[21]。実に，福澤諭吉の死去した二月三日に先立つことわずか一ヶ月のことであった。この論説が『時事新報』に掲載されるや，大きな反響を呼びおこし，徳富蘇峰は，同年一月十三日の『国民新聞』紙上に，「瘦我慢の説を読む」と題する一文を掲げて，勝海舟を弁護し，勝の行動は国際状勢による日本の破滅を防がんとする臨機の措置であると主張した。これにたいして福澤は，蘇峰の言は，当時の外交事情を知らないための空談であるとして，『時事新報』主筆の石河幹明に当時の事情を語り聞かせ，同月二十五日の紙上に，その反駁文を発表させた。

この論戦の内容は勿論，興味深いもので後に考察するところであるが，その前にまず，福澤の哲学ともいうべき『瘦我慢の説』にたいして，福澤も認める勝海舟の哲学について語っている『氷川清話』について，その内容を吟味し，武士道をめぐる両者の世界観および人生観に肉薄しようと思う。

---

(20) 前掲，569～570頁。

(21) 前掲，『全集』第6巻，605頁。富田正文解説，参照。

(三) 武士道をめぐる福澤諭吉と勝海舟

勝海舟が，みずからその生涯，その人生観を語ったのは，明治三十年，三十一年頃のことであった。東京赤坂氷川町，氷川神社の傍の勝邸において，勝海舟の門下生もしくは彼を私淑する人々が集まって翁の回顧談をひき出し，それを速記させて一本にしたものが『氷川清話』である。編者は吉本襄であった。勝海舟はいわゆる座談の名手で，適切な諧謔やウィット，ときに罵倒や嘲笑ともとれる言葉遣いを交えて，人々を魅了したものと思われる。この『氷川清話』が評判になり，広く読者の支持を得て，『続氷川清話』，『続々氷川清話』と，ひきつづき出版された。

明治三十二年一月，巌本善治は，「先生を失うの歎き」という一文を『女学雑誌』四八〇号（一月二十五日）に掲載，つづいて四八一号（二月十日号），四八二号（二月二十五日）の二回にわけて，「海舟先生の日常」（のちに「氷川のおとずれ」と改題），やがてこれらの諸文章を中心として，東京堂から『海舟余波』として発売された。昭和二年，巌本善治は，『海舟余波』以後に書いたものを加えて再構成し，書名を『海舟座談』と改め，海舟の側近，知人，友人および門下生らの談話および感想十二編を加えて面目を一新し，岩波文庫の一冊として出版された。(22)

しかし幕末維新の群像との接触およびエピソードなどについては，『氷川清話』の方が，はるかに内容豊かである。『海舟座談』も興味深いが，『清話』を主として，『座談』を従として，勝海舟の人生観にふれ，彼の武士道を導き出すことによって，福澤の『痩我慢の説』と比較検討しようと思う。

勝海舟は，文政六（1823）年，本所亀沢町の男谷邸（おたに）で，旗本，勝左衛門太郎惟寅（これとら）（小吉）の長男として生まれた。（勝部真長『勝海舟伝』，勝部真長編『氷川清話』角川文庫，付録，平成七年。同書，287頁）。この年，七月，日本蘭学史に大きな足蹟を残したシーボルトが，長崎に到着した。福澤諭吉が，天保五（1835）年生まれであるので，勝は八歳ほど年長ということになるが，ほぼ同時代人であると云うことができよう。それと同時に，勝家が三河以来の旗本とは云いながら，禄高は四十一石一斗二合六勺九という小禄で，小普譜組に属していた。中津奥平藩の福澤家が十三石二人扶持という禄高であることからすれば，両家はともに下級武士で，貧乏であることは共通している。「おれが子どもの時には，非常に貧乏で，ある年の暮れなどには，どこにも松飾りの用意などしているのに，おれの家では，餅をつく銭がなかった。……妻をめとった後もやはり貧乏で，一両二分出して日蔭町で買った一筋の帯を，三年の間，妻に締めさせたこともあった。(22)」と語っている。

福澤諭吉の生家が，どれほど貧しかったか，具体的な叙述がみられないので，何とも云い難いが，勝家の貧乏ぶりは，相当なものであった。しかし諭吉にとっても，海舟の場合も，人生の転機とな

---

(22) 勝部真長編『氷川清話』，角川文庫，平成七年，15～16頁。

ったのは，二人が蘭学を学び，これに習熟したことであった。福澤は，安政元（1854）年，兄三之助の奨めで長崎において蘭学の学習をはじめたが，十九歳であった。一方，勝は，天保九（1838）年七月，父，左衛門太郎（小吉）が隠居した後をうけて家督を相続した。小吉は，内職に古道具屋などをやり，無頼の徒とも交わったが，剣道は達人で，そうした父の血筋をうけついだ海舟は，剣術を新戚の男谷信友に学び，のちに中津藩出身の島田虎之助の門に入り，天保十四（1843）年，師匠から免許皆伝を受けた。（石井孝『勝海舟』吉川弘文館，平成六年，2頁）剣の道は，幕末動乱の時期に彼を支え，信念に生きる男としての逞ましい精神を涵養する糧となってあらわれたのであった。だが，一介の貧乏旗本の伜にすぎなかった海舟を，断末魔に喘ぐ幕府とはいえ，海軍の中枢にまでおし上げたのは一体，何であったか。それは，おそらく蘭学にたいする造詣であったろう。

彼は弘化二（1845）年，筑前藩のお抱え蘭学者永井青崖の門に入って蘭学修業に志したが，弘化四（1847）年秋から翌五年にかけて，蘭学辞書『ドゥーフハルマ』二部を筆写し，その一部を売って生活の資にあてたのはよく知られている。巖本善治が編纂した『海舟座談』のなかで，明治三十一年六月三十日（午後三時より六時まで）に語ったくだりに，つぎのような一節がある。

> 「その字引は，弘化四年秋としてあるだろう。『ヂウ，ハルマ』（『ヅーフ・ハルマ』）といって，オランダとフランスの対訳であったのに，ヘンデルキ（ヘンドリック・ヅーフ）が，日本語を入れたのサ。日本語は，通詞（つうじ）や唐通詞（とうつうじ）に聞いたのサ。第一世ナポレオン騒ぎで国へ帰れず，長崎へ二十年もこもっている間にしたのサ」。(23)

勝はその後，嘉永三（1850）年，赤坂田町の茅屋にささやかな蘭学塾を開いたが，その塾頭となったのは，後の統計学者，杉亨二（こうじ）で，子弟を教育しながら，勝は時機到来を待っていた。（勝部真長編，『氷川清話』平成七年，角川文庫，付録，『勝海舟伝』289頁）

嘉永六（1853）年，黒船の来航によって，幕府は伝統的な鎖国政策を抛棄して開港にふみ切らざるをえなくなった。しかし外国との接触によってひきおこされるであろうさまざまな問題にたいして，幕府としてどのように対応すべきか，老中阿部伊勢守正弘は困惑していた。そこで彼は，諸大名や幕府諸有司はもちろん，無役の幕臣，陪臣および浪人に至るまで，その意見を幕閣に上申することを許し，幕閣への上書の提出を奨励した。実にこの上申書のなかで，勝海舟のものが，きわ立って優れていた。その要点は，㈠幕府役人における人材の厳選，㈡海防上，軍艦建造の必要性，㈢江戸防備の厳重な措置，㈣兵制の改革と教練学校の建設，㈤火薬・武器の製造，であった。このうちとくに注目すべきことは，㈡について，軍艦の建造その他海防にかかわる費用については，貿易の利益をもって当てるべきであるとし，また㈣については，旗本を天下武備の根元として，海外の新式兵器の導入，西洋風の兵制への制度改正などを，断固として行うべきであることを主張してい

(23) 岩本善治論，勝部真長校注『海舟座談』岩波文庫，91頁。

る点であった。[24]

勝のこの卓抜な識見の旺溢している上申書に注目し，彼を抜擢すべく海防掛岩瀬修理（肥後守）忠震に推挙したは，大久保右近将監（一翁）であった。勝が大久保一翁と岩瀬忠震の知遇をえて，幕府権力の中枢に支持者をもつに至ったことは，勝にとっては幸運と云うべきであった。しかしそれにもかかわらず，やがて強力な盟友となるべき勝と，大久保および岩瀬，それにのちに咸臨丸渡米に際し，福澤諭吉が従僕として仕える木村攝津守喜毅等との間には，同じく旗本とはいえ越え難い断絶が支配していた。勝家は，すでにのべたように，四十一石一斗余の小禄，最下層の御家人の家柄であったため，父小吉は，非役で貧困と絶望のうちに一生を終った。

伝記者の伝えるところによれば，海舟の父小吉は，勝家の家つき娘お信のところに婿養子として入った者であった。小吉は男谷平蔵という旗本の三男（妾腹）として生まれ，七歳の時，勝甚三郎元良の養子となり，その娘のお信と結ばれたのであった。父方の血筋を辿っていくと，男谷平蔵は，男谷検校という盲人の九人目の子で，三万両の金で旗本の株を買って武家となったものであったといわれている。三万両という巨額の金子を，海舟の曽祖父にあたる検校は，どのようにして手にいれたのであろうか。「十両盗めば頸がとぶ」と云われた時代である。尋常な手段では，とてもこのような大金を獲得することはできない。

男谷家には，つぎのような話が伝わっていた。男谷検校は，越後の国小谷，あるいは小千谷郷の出身で，十七，八歳の頃，わずか三百文の銭をもって江戸に出てきたが，ある日のこと，幕府の奥医師石坂しめ一の邸の門前で倒れていたところを，石坂検校が同情し，仲間部屋で介抱することを命じた。盲人の一青年が仲間部屋で聞いたのは賭博の話で，町役人の手の及ばない幕臣の邸内は，毎夜のように賭博場が開かれ，勝の曽祖父の盲人は，ここで大いに利殖の才を発揮し，巨万の富を積んだという。容易に信じられないような話であるが，ありえないことではない。ともかく勝の祖父平蔵は，このようにして旗本の株を買い，幕臣となったといわれる。[25]

やや脇道にそれたが，勝海舟が軍艦奉行となり，幕府海軍の総帥に擬せられたとしても，その出自は他の幕臣の有力者とは争うべくもなかった。封建社会は家柄と身分すなわち門閥の社会である。福澤諭吉も，この門閥制度の下で懊悩したが，勝の場合も同様であったと思われる。ただひとつだけ，福澤と勝とでは決定的に異なる条件があった。福澤の場合は，幕臣とはいえ，反訳方という低い身分で，蕃書調所の支配に属していたが，所詮，陪臣の出身である以上，幕政の中枢とは直接的には無縁であった。これに反して，勝は，幕府海軍というまったく新しい領域で，下層幕臣の出身ながら，十分にその才能を発揮する機会に恵まれていた。しかし同時にこの幸運は，平穏に幕藩体制が維持される時代であれば，勝をしてまったくと云っていい程，近づく機会のなかったであろう

---

(24) 松浦玲『勝海舟――維新前後の群像』，中公新書，昭和五五年，40～42頁。

(25) 勝部真長『勝海舟』，上揚『氷川清話』付録，参照。

幕府権力の中枢を形づくる官僚層と接触する機会をもたらしたことである。

たとえば，上申書を契機に彼を見出し，岩瀬忠震に推挙した大久保一翁は，終生，勝と友好関係を保ち，幕府の敗戦処理に協力して，新政府に仕官したという点でも共通しているが，その一翁は，文化十四（1817）年の生まれであるから，勝より六歳年長であった。禄高は，五〇〇石で，それほどの大身ではないが，三河以来の譜代の旗本で，その家柄にふさわしく，父親は幕府の中級官僚の地位をいくつか経験し，一翁自身も，数え年十四歳にして将軍家斎の小納戸，天保十二（1841）年，二五歳で右近将監となり，翌年，家督を相続，嘉永七（1854）年，すなわち安政元年に目付に登用され，新設の海防掛を命じられた。(26)

目付は，幕府官僚の目指すエリート・コースの要職で，その中でも海防掛は，老中首座，阿部正弘が創設し，そのなかには岩瀬忠震，永井岩之丞尚志，川路左衛門尉聖謨（としあきら），堀織部正利忠（利熙（としひろ））などの俊才が抜擢されて，幕府外交の実務を司り，日本の運命を担う人々であった。勝は三三歳のとき，一翁が右近将監となり，彼の推挙を得て，さきにのべたように，その年の九月，提出された海防意見書によって，蕃書翻訳所勤務と勢州海岸見分を命じられている。すなわち，一翁が，目付・海防掛としてその敏腕を振っていたとき，勝はようやく，非役の小普請組を脱して，将軍出向の場合のお伴掛小十人組に編入された。そして七月，創設されたばかりの長崎海軍伝習所に派遣されたのである。

大久保一翁は，勝のよき理解者として，みずからも明治政府に出仕し，明治五（1872）年，東京府知事に任ぜられ，晩年の明治二十（1887）年には子爵を授与されている。だが，一翁の盟友で海防掛目付岩瀬忠震（ただなり）と勝との関係もまた，幕末，危機的状況にあった外交関係の一断面を現わすものとして興味深い。

岩瀬忠震は，文政元（1818）年の生まれであるから，勝よりは五歳年長で，旗本，設樂貞三（しだらかち）（徒頭（かしら））の三男として生まれた。天保十一（1840）年，旗本岩瀬忠正（書院番）の養嗣子となり，嘉永元（1874）年，阿部老中から目付に抜擢され，海防掛を命じられた。この海防掛というのは，今日，いうところの外交官の役割を担う官僚層で，その点，大久保一翁とは親密な関係にあった。

大久保一翁と岩瀬忠震，幕末外交を担ったこの二人の人物が，勝を評価し，彼の立身の緒口をつくったことは興味深いが，この両者の勝海舟との関係は，必ずしも直接的というのではなく，前者の場合は，勝と協力して，幕府の敗戦処理に力を竭くし，後者との関係では遣米使節派遣をめぐる歴史的経過のなかで欠くことのできない存在であった。

岩瀬は，幕府が日米和親條約の締結後，さらにイギリスおよびロシアとそれぞれ和親条約を締結，安政二（1855）年十月，堀田正睦が老中に就任後，十二月，日蘭和親條約調印され，外交問題は転機を迎えた。天皇の勅許を得ずして，幕府が無断で西欧諸国と條約を結んだことは，朝廷を無視す

---

(26) 松岡英夫『大久保一翁――最後の幕臣』，中公新書，昭和五四年，9～10頁。

る専横な行為であるとする薩摩藩および長州藩を中心として尊王攘夷勢力運動は活発となった。幕府は條約勅許を得ようとして，安政五（1858）年，老中堀田正睦を特使として京都に派遣，京都朝廷の有力者の説得を試みたが成功せず，幕府外交は，暗礁に乗り上げた形となった。岩瀬は堀田特使に随行して上京，しかし勅許に成功せず，その間，橋本左内と会談して，異常な難局を打開するためには，将軍継嗣として一橋慶喜を迎えるのがもっとも適切であると主張して，橋本左内に松平慶永を宰相として，一橋慶喜の将軍就任実現に努力することを強く要求した。

ところが案に相違して，後に紀伊徳川家から慶福（家茂）を迎えることを主張する井伊直弼が大老に就任するに至り，岩瀬は，この人事にはげしく抗議したため，後に井伊大老から疎んじられる結果となった。すなわち，安政五年六月十八日，神奈川沖で，ポーハタン号で，タウンゼント・ハリス（Townsend Harris）と会見，翌十九日，幕閣の大会議席（老中以下目付などを含む）において，即時，調印を主張，井上清直とともにポーハタン号艦上で日米和親通商條約に調印した。この急進的な行動は，井伊直弼を激怒させたが，はじめは，その卓抜な能力のために大老といえども如何ともなしがたかった。忠震もまたエリート官僚としての自負心から，「大老何するものぞ」という挑戦的な気慨と，封建体制の根幹をなす身分秩序を軽視することによって，想像以上に大きな反撥を買ってしまった。

安政の大獄が深刻化するなかで，井伊大老は，つぎつぎと一橋派と目される役職者を左遷あるいは永蟄居などの処罰をもって臨み，やがて，岩瀬も永蟄居に処せられるのであるが，その直前，安政五（1858）年五月十二日，長崎在住の木村攝津守喜毅にあてて，その弾圧の模様を，つぎのように書き送っている。

「土円州も突然左遷ト相成り，扨〻朝野愕然を極め申候。只々直情径行之輩，追々此の如き事ニ相移る可き勢ひニ御座候。終には道路以目にも至り申す可く候。相対上書して総て廟堂有志の輩を目し，姦党叛を謀る位ニ建白候由，右之事相徹し候事と相見へ，先ず上丹第一に転じ，追々大司農，箱館，小生輩へも波及之様子ニ之有り候。銘々自己之屈辱は少しも厭い申さず候得共，時事此の如きに至り候ハバ，果は如何なる事に相成る可き哉，此際天下重大之事件品〻輻湊治乱安危の岐に臨み，此様なる事ニ相成候而ハ仰天而咨嗟外，之無く候。只，今日は鶴書降候哉，降候哉と存じ，其日其日を送り候迚に之有候。面謾世界と相成候ハヾ，悉く国事を誤り申す可しと，慨歎止まず候」。(27)

憂国の至情の溢れた書簡と云うべきであろう。木村攝津守は，安政四（1857）年二月，長崎駐在目付として江戸を出発，四月，四五日かかって長崎に到着し，長崎海軍伝習所の取締となった。そ

(27) 岩瀬忠震の木村喜毅宛書簡，安政五年五月十二日付（史料紹介，木村喜毅〔芥舟〕宛岩瀬忠震書簡，河北展生，高木不二，高輪真澄，木村直也，細川義，西澤直子，慶應義塾福澤研究センター編『近代日本研究』5，1988,215頁，参照。なお，岩瀬忠震の生涯と業績については，松岡英夫『岩瀬忠震――日本を開国させた外交家，中公新書，昭和56年，を参照。

してここで，やがて咸臨丸艦長として，微妙な関係をもつに至る勝麟太郎に出会うのである。

『瘠我慢の説』と『氷川清話』に現われた福澤と勝海舟との世界観における対立は，実は，木村攝津守と勝との対立の側面をも代表している。いずれにしても，『福翁自伝』のなかで，回想風に物語られている勝海舟の姿は，彼の人間像の一面ではあっても，全体像としては，必ずしも適確に把えられていないように思われる。彼の思想と行動を理解するためには，彼をとりまく客観的な情勢や人間関係の複雑な諸相，彼が接触した幕末の人間群像，川路聖謨，永井尚志，岩瀬忠震，大久保忠寛といった幕府要路の人々のほかに，西郷隆盛や坂本龍馬，横井小楠や島津斎彬などの人々との交遊から来る影響なども重要であろう。その意味で，勝の武士道とは，福澤の『瘠我慢の説』とは対照的に，より近代的な色彩を帯びていたのかもしれない。

福澤諭吉は，勝海舟はじめ，榎本武揚，木村芥舟（喜毅），栗本鋤雲および徳川頼倫等にこの『瘠我慢の説』を送付した後，つぎのような短い書簡を添えた。

> 拝啓仕候。陳（のぶれ）ば過日，瘠我慢之説と題したる草稿一冊を呈し候。或は御一読も被成下候哉。其節申上候通り，何れ是は時節を見計，世に公にする積に候得共，尚熟考仕候に，書中或は事実の間違は有之間敷哉，又は立論之旨に付，御意見は有之間敷哉，若しこれあらば，無御伏臓被仰聞被下度，小生の本心は漫に他を攻撃して楽しむものにあらず，唯多年来，心に繹然たらざるものを記して輿論に質し，天下後世の爲めにせんとするまでの事なれば，當局の御本人に於て云々の御説もあらば拝承致し度，何卒御漏し奉願候。匆々頓首。（句読点を現代風に修正……引用者）
>
> 二月五日　　諭吉

なお，追伸として，福澤は，

> 尚以彼の草稿は極秘に致し置，今日に至るまで二，三親友の外へは誰れにも見せ不申候。是亦乍序申上候。以上。

と書き加えている。

これにたいし，勝および榎本から返書がおくられてきた。榎本武揚の答書は

> 拝啓。過日御示被下候貴著瘠我慢中，事実相違の廉（かど）竝に小生之所見もあらば云々との御意致拝承候。昨今別而多忙に付いづれ其中愚見可申述候。先は不取敢回音如此に候也。
>
> 二月五日　　武揚
>
> 福澤諭吉様[28]

これを要するに，御意見は拝見したが，今は極めて多忙なので，そのうち自分の意見も述べさせ

(28)『福澤諭吉全集』第六巻，571 ～572 頁。

ていただくという，ごく短いもので，真剣にとり合わない感じであるが，勝の答書は，さすがに凛とした響きを感じさせる。

勝安房氏の答書

従古（いにしえより），當路者古今一世の人物にあらざれば，衆賢之批評に當る者あらず。不計（はからず）も拙老先年之行爲に於て御議論数百言御指摘，実に慙愧に不堪（ママ）ず，御深志忝存候。

○行蔵は我に存す，毀誉は他人の主張，我に與（あず）からず我に関せずと存候。各人之御示御座候とも毛頭異存無之候。御差越之御草稿に拝受いたし度，御許容可被下候也。

二月六日　　安房

福澤先生

拙，此程より所労平臥中，筆を採るに懶（ものう）く，乱筆蒙御海容度候。

この文章の冒頭の一節は，味わうべき内容を秘めている。昔から当代一流の者，一世に卓絶した者でなければ，衆賢，すなわち一般大衆の批判が的中するものではない。思いがけず，先年の自分の行動が貴殿の御批判の対象となったのは，まことに辱けない次第で、深く感謝する次第です，という意味であろう。

いかなる人物も，他人から無視されることは忌み嫌う。してみると，福澤のような卓抜な言論人が，大文章を掲げて自分を批判の俎上にのせてくれたことは，まことに名誉で，深く感謝するということだが，いうまでもなく，ここには多分に皮肉が込められている。だが，つぎの「行蔵は我に存す。毀誉は他人の主張，我に與からず，我に関せずと存候」とは，勝一流の開き直りともいうべきものであるが，強烈な個人主義を感じさせる。自分の行動は，自分が全責任を負う。他人に何と云われようと，自分には関心はない，ということで，いかにも勝らしい云い分といえよう。

『瘠我慢の説』の公表によって，勝と福澤という幕末から明治にかけての二人の巨人の思想と行動における対照性が明白となり，またこれをめぐって賛否両論が活発に展開された。

勝海舟と福澤諭吉が，万延元年，遣米使節派遣に伴う咸臨丸のアメリカ合衆国への渡航中に乗り合わせたということは，まったく偶然ではあったが，ある意味で不幸な出会いであったと云えないこともない。勝と福澤における武士道の本質とは何であったのか。『氷川清話』についてふれることは，勝の哲学を探るために必要であるが，同時にアメリカ渡航以後の彼の国外および国内における複雑な政治的体験と併せて，はじめて彼の武士道が明らかになるであろう。

〈追記〉『瘠我慢の説』と『氷川清話』と題し書き綴ってきたが，『氷川清話』については充分にふれることができなかった。他日，続編において，この点についてを論究することとしたい。読者，これを諒とされたい。

（名誉教授）